

2021年3月度総評（浦歌無子）

新年度となりました。引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

三月も心動かされる作品がたくさんありました。詩を書くことで、自分が変わったり内面の真実を見つけたり、また読む側は、世界の新たな見方を教えられ、生が豊かになってゆく。それは本当にすごいことだと思います。

今年度も新しい詩との出会いをととても楽しみにしています。

ジンジャーエールの泡たちが  
弾けて空に逃げる度  
死にゆく私の一部分

八雲陽（愛知県）

空へと弾ける「ジンジャーエールの泡たち」が「死にゆく私の一部分」を呼び起こし、「死にゆく私の一部分」が「ジンジャーエールの泡たち」を想起させる。外の世界と内面がつながる感覚に惹かれます。ほろ苦いジンジャーエールと響き合う身体と魂の傷つきやすいがゆえの輝き。また、今この瞬間にも死んでは生まれている細胞、からだのなかで繰り返されている宇宙的な神秘にも思いが及び、視線が空に向かっていることもあり、どこか解放感も感じられます。

踏みにじるためであって  
靴は美しい  
牛の豚の馬の羊の山羊の

血の通っていた皮

佐々木みつる（東京都）

「血の通っていた皮」であることをあまりにも簡単に忘れてしまう人間。「踏みにじるためであって／靴は美しい」。動物の痛みを真正面から書かれるよりも胸に刺さります。

どこでもないどこかに  
家を建てて  
玄関の前で眠れたらいいのに

八雲陽（愛知県）

なぜ「玄関の前」なのか。自分の居場所があることの安堵感と「どこでもないどこか」ではなくなってしまった「家」に縛られてしまうことへの抵抗がせめぎあい、自分の気持ちにぴったり適うところが空間の境界である「玄関の前」ということなののでしょうか。謎が心に残りました。

通路脇ベンチ菓子パン食べる夜  
品川駅とひとつになれる

石井鉛（東京都）

「通路脇ベンチ」で「菓子パン」を食べることに、夕食を食べそこなったのか、とりあえずお腹を満たそうとするやむを得ずの状況を想定してしまうのですが、「ひとつになれる」に、自分を受け入れてくれる場所があるという希望を感じました。包み込む懐の深さがあるのだろうか、私にはよそよそしさしか感じられなかった都市部の大きな駅の見え方が少し変わりそうです。

医者の説明はつづく  
耳の遠い祖父は  
おれを見ている

田中傲岸（熊本県）

「祖父」の心情も「おれ」の心情も描かれていませんが、それぞれの心のありようが感じとれます。二人の関係性も。同じ作者による「祖母は最近／見えないだれかに／しきりに手を振って／なにかを待っている」も、慈しむ気持ちで掬い取られた「祖母」の描写が胸に沁みました。

ある夜  
各々の「好き」を武器にして  
人々は闘いに出かけた

いけす（東京都）

「好き」を選ぶということは、好きではないものを切り捨てるということ。つまり「好き」は「武器」になり得るということ。鋭い批評の視点。

そう遠くないうちに火を  
絶たれるよ

暮田真名（東京都）

火を絶たれて困るのは人類だけ。耳元でささやかれたかのような「そう遠くないうちに」の緊迫感にドキッとさせられました。

明け方の良い川が語りかけてくる

青木雅（埼玉県）

夢うつつの耳に届く川の音を聴いているうちに心が澄み渡ってゆくようすが描かれているように思いました。「語りかけてくる」という言葉が優しく、やわらかい光に包まれるかの

よう。

母の名に子を足したのが私です

まちりこ（埼玉県）

「私」の内面は一切語られていないのですが、葛藤を感じてしまうのは、「母」の子どもでありつづけるという母子関係の逃れることのできないひとつの側面を貫いているからでしょうか。

弔いのように打ち込むパスワード

燦嗣いとり（愛知県）

「弔いのように」という比喻によって、「パスワード」がただの記号に変換されないものとして立ち上がっていて、それは別れた恋人の名前なのだろうか、亡くなったペットなのだろうかとさまざまな想像が広がります。「打ち込む」たびに呼び覚まされる風化することのない記憶。また、人に教えてもらうわけにはいかないし自分も教えるわけにはいかないパスワード、それはセキュリティ上というだけではない秘密を抱えていたのだと思い及び、究極のプライバシーを介して全世界に開かれているインターネットの世界につながるものが急に不思議に思えてきました。

図書室は

ちょっと春までねむります。

ひよこが来たら

おこしてください。

ベロニカ（神奈川県）

「図書室」のすべての本が眠りについたときの圧倒的な静けさを破る春の使者が、ちいさくて黄色くてぴよぴよとにぎやかな「ひよこ」であることの楽しさ。

翼を得たところで

立ち止まってしまった

風船（東京都）

人生において新たなスタートに立ったときの自由と怖れ。きっと逡巡の後には飛ぶことができる。「翼」は得られたのだから。

三月の終わりは

四角い砂糖のようで

きれいな別れをぐるんと混ぜる

真島（京都府）

ティーカップに入ったコーヒーに「四角い砂糖」を落とし、スプーンでかき混ぜている映像が浮かびました。「別れ」が季節に溶けてゆく。また、<さよなら三角またきて四角>のわらべうたを思い出しました。「三月」（三角）と「四角」と「ぐるん」の丸がでてくる面白さ。「別れ」を混ぜる「ぐるん」に、また出会いの 때가巡ってくる気配が感じられます。